

地域住民とともに暮らしやすい街づくりを目指して



左から川上正志維持管理係長、
合田茂満事業課長、梅津朗雄主任技師



急傾斜地を抱え、 夏は海水浴場の保全にも努める

昭和56年度から朝里ダムが事業化されたのに伴い、当初ダム事務所として設けられたのが現在の「北海道小樽土木現業所 事業部 事業課」です。平成5年度にダム工事が終了し、道の出先機関として建物をそのまま引き継ぐかたちでスタートしました。まだ10年に満たない新しい事業所です。

所管区域は小樽市と赤井川村の1市1村で、急傾斜地を抱えているのが最大の特色です。驚くことに危険カ所は110カ所と全道の10%にも及び、そのうち57カ所が急傾斜地指定を受けています。道内では、函館や室蘭にも急傾斜地が集中していますが、こうした危険な場所にも民家が建っているという状況は、あまり見られないということです。また、札幌市民もよく利用するドリームビーチなど海水浴場が4カ所あり、夏場は特にトラブルが発生しやすくなります。

「抱えている問題はほかの事業所とは少々異なると思います。ですから職員同士でいろいろ話し合う機会も多いんですよ。」と言うのは合田茂満事業課長。道路、河川、急傾斜、砂防指定地、海岸保全、朝里ダムという多様な事業と向き合っていかなければならず、「勉強は欠かせません。」と言葉にも力が入ります。

小樽環状線の事業化に向け ルート選定

小樽市はおよそ15万人弱の人口をかかえる観光都市でありながら、札幌市と小樽市を結ぶ幹線の国道5号が去年やっと4車線になるというお寒い状況でした。札幌市に隣

接する市や町は人口が伸びているにもかかわらず、減っているのは小樽市だけ。これには交通上の問題もあると考えられています。たしかに札幌自動車道という高速道路はありますが、それも降りてしまえば後は国道が一本と一部道道、山に張りつくようにして伸びている生活道路があるだけです。交通のネットワークとしては非常に貧弱であり、小樽環状線の事業化に向けたルート選定が大きなテーマでもあります。

管内の道路については11路線59kmがほぼ改良済みで、維持管理と2次改修がメインになっています。小樽市の顔でもある小樽駅前の中央通りは来年改修を終える予定で、舗装材料もグレードの高いものを使い美観に配慮。市民はもちろん観光客にとっても歩いて楽しい道づくりを目指しました。

「観光客の方から街路樹についての問い合わせが、市役所などにも入ります。思い出に残る、北海道らしい街並づくりに樹木の選び方が大きな役目を果たしているのだと、改めて認識しますね。」と川上正志維持管理係長が、小樽ならではの特徴にふれます。

運河沿いは観光スポットとして毎年たくさんの方が訪れますが、この臨港線に設置されている電柱を地下に埋める計画が進んでいます。平成14年度から16年度までの3年間で行う予定です。まず、電柱が無くなると頭上の電線類が地下に埋められるので美しい街並が形成できます。道路の見通しが良くなることで、信号機や道路標識も見えやすくなり交通の安全性が向上。歩道が広く使え、歩行者はもちろんベビーカーや車椅子を利用する人にも、快適で利用しやすい歩行空間を提供することができます。また、災害時の事故防止や被害の軽減にも役立つと考えられます。

ただし、この地域は人の往来が多く、営業している店や観光客に迷惑をかけないよう最大限の注意を払っていかねばなりません。地盤が非常に悪く、「家がガタつくのでは？」と心配する住民もいて説明会も繰り返し行われています。観光都市にふさわしい街づくりは、ひとつ、ひとつの成果が実を結ぶことでやっと実現するようです。

冬期間の課題として、除雪問題があります。小樽市は雪捨て場が慢性的に不足しており、小樽港などに直接捨てられているのが現状です。そのため雪が沖まで流れていかないようにフェンスを設けたり、雪が融けた後に泥がたまるのでそれを除去しなければいけません。毎年このことだけに、今後の対策に注目が集まります。

ロードヒーティングは29カ所、5万m²あり小樽市と歩調を合わせながらスイッチの切り替えを行っています。地元住民はもちろん観光客の安全を確保するため、薬剤散布についても十分配慮。転倒防止に努めています。



歩きやすく除雪された歩道

また、小樽市は国土交通省道路局が平成11年度から導入している「社会実験」の地域指定の認定を平成13年度に受けました。市では「冬期道路環境改善検討協議会」を設置し、小樽駅に近い都通り梁川商店街をその対象として実験を開始。平成13年12月25日から14年2月8日まで商店街の道路を頻繁に運搬排雪することで無雪化し、大型融雪槽を設置したような状況にしました。この結果、集客や売り上げ増など数字的な変化は得られなかったものの、将来的な取り組みの方向性が検証されたことは大きな収穫だったようです。

市民にもっと親しまれる勝内川へ

「自分たちの住む街を、自分たちの手で良くしていこう。」という市民の動きが活発になってきました。朝里地区では歩道に花の苗を植え、水やりなどが市民の手によって行われています。色とりどりの花が道路空間を彩り、歩行者にも、運転手にも、もちろんそこに住む人たちにも心豊かな印象を与えています。散策路をはじめ、朝里川などの川や朝里ダム周辺、展望台などのゴミ拾いも熱心に行わ



朝里地区のみち普請活動

れ、バスで移動しながらクリーンな街づくりに汗を流しています。こうした地域住民の輪がもっと、もっと幅広い地域に広がっていけば、小樽市に限らず北海道の各市町村もさらに魅力あるものになっていくことでしょう。

勝内川は、小樽開発の中心となった川で古くから工業用水としても活用されています。町内会による「勝内川清掃デー」が設けられ、「サケがそ上できる川」を目指した意見交換も盛ん。管理者である北海道は、さらに親しまれる川にしていこうと事業を計画。川を下流部の都市散策ゾーンと、中・上流部の自然散策ゾーンに分け、「安全と景観」「生きものたち」「人びとの利用」に配慮した川づくりの工事が行われています。



河岸散策路が整備された勝内川

都市散策ゾーンは河岸散策路を、河川用地にゆとりのない区間には河道内散策路を設け、お年寄りなどに配慮して可能な限りスロープも整備していきます。テラスを設け冬は投雪場に、雪のない時期は川を眺める休憩所としての使い方も考えられています。自然散策ゾーンでは、護岸を作りかえ補強、補修することで治水上の安全性と景観性の両立を確保。河口から上流までの間に高さ2mの落差工が12基あり、水中の生き物にとって生息しづらい環境だったことから、多段式落差工や水制工などの設置で生き物たちが暮らしやすい川を目指していきます。

これからも地域のために

これからの抱負について合田課長は「これまでやってきた都市計画の経験を生かし、小樽市やその周辺に貢献できるようがんばっていきたいですね。」とニコリ。梅津主任技師は「急傾斜や砂防の問題が今、一番の関心時です。予算の問題もありますが、最大限努力し地域の声に耳を傾けたい。」と言うと、「すみやかな回答と実行を心がけています。」と川上係長。職場の皆さんが協力し合うことで、さらにいい仕事ができることを確認しました。

